

## 戦前期のブラジル移民の建築遺構 －レジストロ植民地の事例－

内田 青蔵<sup>※</sup>

### 1 はじめに

わが国では、明治以降、海外移住も自由となり、また国策としても海外移民政策が展開され、日本人も多く、の国に移住した。この移民の動向に関しては、明治期前半はハワイ、後半は北アメリカが中心であったが、賃金もやすくまた日本人の勤勉さもあるが、アメリカでは本土の労働者の仕事を奪うことにもなって排斥運動が起こり、1907（明治40）年の日米紳士協約により移民制限も行われた。そのため、以後、新たな植民地として南アメリカへの移民が開始されることになる。本稿で取り挙げるブラジルのレジストロ植民地は、後述するように1913年にブラジル拓殖会社がジボブラに「桂植民地」を造成したのに始まり、1919年には入植者は400家族を超えたといわれている地区である。入植時は、米作、甘蔗加工、コーヒー、養蚕などの主作物の模索が進められ、現在では茶、バナナなどの生産地として発展を遂げたことで知られている。

ところで、移民の人々にとって、最初に着手する作業のひとつが、生活の基盤となり、労働の疲れを癒す住まいづくりであったと考えられる。一般にこうした移民・移住した人々の住まいは、当初は異国の地であってもそれまでの慣れ親しんだ伝統的な生活スタイルを踏襲したものが造られ、やがて、定着していく中で異国の気候・風土や生活習慣を取り入れたものへと変化していくと考えられている。こうした住まいを中心とした建築物やあるいは宗教建築とい

※神奈川大学教授

ったものに想定される変化は、異文化交流の実態を示す貴重な研究資料でもあり、また、日系移民の人々がどのような生活文化を異国の地に構築してきたかを知る貴重な文化遺産でもある。

一方、ブラジル国内でもこうした日系移民の人々の住まいの文化価値が認められ、近年、ブラジル国立文化遺産研究所（IPHAN）では、リベイラ溪谷地域の文化景観研究として移民文化の調査を行い、その成果をもとに「サンパウロ州レジストロとイグアペにおける日本人移民文化の遺産認定」（Dossie de Tombamento de Bens Culturais da Imigracao Japonesa, Registro e Iguape - SP）を提出した。その結果、日系移民に関わる14棟の建築と製茶業の基となったリベイラ茶農園の最初の紅茶苗1件が、文化遺産として登録され、ブラジル国の保護の対象物件となった。こうした日本移民の住まいを中心とした建造物が文化財として保護されることは、われわれ日本人にとってもうれしいことであるが、そうした実態はあまり知られていない。筆者らは、こうした動きを機に、改めて移民の人々の生活に注目し、当時の移民の人々の生活・住まいあるいは農業の際に利用した技術や農具などとわが国の伝統的生活・住まいあるいは農具などに注目し、生活史的観点・民俗学的観点あるいは社会学的観点といった複眼的観点による生活総合比較調査研究をめざし、その基礎調査として2013年1月にレジストロを訪れ、レジストロ地区の保護建物の視察を行った。視察対象の建築物の内訳は、

教会建築2棟、工場建築1棟、住宅建築7棟の合計10棟であり、また、リベイラ茶農園の最初の紅茶苗1件も視察を行った。本稿では、これら視察を行った建物のうち、目視ならびに簡単なヒアリングをもとに7棟の住宅建築の概要を紹介し、ブラジル移民の生活総合比較調査研究の端緒としたいと考えている。なお、本稿の建物概要について記す際の基本文献は、国立文化遺産研究所（IPHAN）『文化財技術に関する研究－リベイラ溪谷における日本人移民』2012年（伊丹 ジゼレ ユミ（戸田建設）訳）である。

## 2 レジストロ六十年史刊行委員会発行の『レジストロの六十年』（1978年）にみるレジストロ植民地の開設までの経緯

サンパウロ州レジストロはブラジルの日系移民の最も古い植民地のひとつといわれている。この地は、サンパウロから南西におよそ200キロに位置し、近くには大西洋に注ぐリベイラ川が流れていた。大西洋まではおよそ50キロ離れており、鉄道のなかった入植時は、サンパウロからサントスに出て、沿岸航路でリベイラ川河口まで移動し、川船でリベイラ川を上っていたという。

さて、以下、レジストロ六十年史刊行委員会発行の『レジストロの六十年』（1978年）をもとに、このレジストロ植民地の創設の経緯を振り返ってみたい。

レジストロ植民地の生みの親は、青柳郁太郎（1867-1943）である。青柳は、アメリカ留学の経験を持つ海外発展論者で、1907年頃から当時の政治家で桂太郎（1847-1913）内閣の閣僚として知られる大浦兼武（1850-1918）や床次竹次郎（1866-1935）等とともに桂首相に植民事業を進言し、国策として移民事業の展開を訴えた。しかしながら、植民事業は残念ながら閣議決定を見ることはなかった。そこで、青柳は1910年、資産家から資金を集め、東京シンジケートと称

する企業組合を起して代表者となり、自らブラジルに渡って植民地事業を実現すべくサンパウロで土地の物色を開始した。現地での植民地計画においては、青柳は大原始林の開拓という壮大な計画ではなく、植民者の安定した生活のできる地域として、イグアペを植民地として選んだ。この地帯にはすでに官営植民地が存在し、また、リベイラ川上流にはドイツ人の植民地もあるなどの既開拓地帯で、近海航路のイグアペ港やリベイラ河の運航という交通手段も存在し、また、風土病も無いといった環境で、安心して新しい町を造る諸条件が整っていると考えたからであるという。こうして計画地域を定めた1911年、青柳はその理想と考えられる計画地域に存在する州有地の無償提供を州知事に願い出た。その内容は、以下の通りであった。

リベイラ河と、パリーケラ、アスー、カナネア間に十ヶ年計画で五千家族の日本人農民を移し定着させたいから概地帯の州有地十五万エクタールを東京シンジケートに無償で譲渡して貰いたい、そして植民者の渡航費の償還と会社の十ヶ年間の州税免除及植民地内に農事試験場、種畜場の設置と植民地基地迄の最寄りの鉄道駅及海港よりの道路を州政府で開設して貰いたい」（『レジストロの六十年』p3）

この申し出は、面積を5万エクタールとするなどの修正を経て、1912年3月8日にサンパウロ州政府と東京シンジケート代表青柳邦太郎との間で無償提供の契約が結ばれた。東京シンジケートは、植民地を運営するにあたって、桂太郎を中心に渋沢栄一（1840-1931）、高橋是清（1854-1936）等の実業家を中心に1913年3月にブラジル拓殖株式会社を創設し、東京シンジケートの事業

を引き継いだ。なお、青柳は、現地駐在の取締役となった。

1913年6月には、青柳は新会社の手続きを終え、植民地事業に着手するだけであったが、無償提供の土地の交付がなかなか進まず、具体的な事業は進展しなかった。しかしながら、イグアペ郡が小規模ながら1400町歩の土地を無償提供するという話が起き、青柳は、大事業の実験的植民地として、この土地に小規模な植民地を開設した。これが1913年開始の桂植民地であり、20家族ほどが入植した。

1915年になると、州政府からレジストロに契約した20万町歩の土地の一部提供を受け、レジストロ植民地計画が実行されることになる。ブラジル拓殖株式会社の分譲地は、道路に沿って250メートル、奥行き1キロメートル、面積は25町歩で、これを基準に区割りをを行い、植民者に土地を与えた。1917年には、日本からの植民者が入植し始め、年末には100家族ほどが入植していた。1919年末には、レジストロ植民地総築数544地区のおよそ7割の400家族が入植していたという。一方、日本では植民地事業を国策の一環として事業化することとなり、ブラジル開拓株式会社は、1917年12月1日に国策会社の性格を有した海外興業株式会社(KKKK)に吸収されることになる。レジストロ植民地は、米作を主作として開始されたが、1919年末にはその生産量も多くなり、KKKKでは波止場の隣に大きな精米所と倉庫を建てた。また、1920年頃には、州政府から交付された新たな土地であるリベイラ川上流のセッテ・バラス奥地に新植民地を拓くことにし、第2の植民地開設に着手した。

### 3 目視調査による日系移民の住まいの概要

#### 3-1 入植時における住まいづくりの様相 入植した人々が最初に着手する重要な作

業が、生活の基盤となり、労働の疲れを癒す住まいづくりであった。おそらく、入植した当初は、ごく簡単な建物を建てて過ごし、生業等が定着し経済的にも安定した段階で、本格的な住まいの建設が行われたと推定されるが、その実態はよく分からない。それでも、入植地は、所謂原始林地帯であったため、建築材料としての木材の入手は、さほど困難ではなかったと思われる。

さて、レジストロ植民地の開発にあたっては、青柳は日本から、藤田克己、大野長一、野村秀吉、三浦源三郎、築瀬兵らを職員として送り込んでいる。藤田は、植民地選定時から一緒に活動した人物で、入植者受け入れの準備の担当、築瀬は事務、大野・野村・三浦は測量及び地区割りを担当し、同時に住宅・事務所の建設も担当した。また、少し遅れて、農業技師の橋田正男が農業試験場主任、北島研三が医師として参画し、入植者受け入れの環境を整備していた。1917年末当時の陣容は、以下の通りである。

|       |           |
|-------|-----------|
| 青柳郁太郎 | 現地駐在取締役   |
| 白鳥 堯介 | 支配人       |
| 藤田 克己 | 土地関係担当    |
| 尾山 亀吉 | 土地関係担当    |
| 大野 長一 | 土木関係担当    |
| 大原 重二 | 道路関係担当    |
| 桜木 秀吉 | 道路関係担当    |
| 野村 秀吉 | 測量及び地区割り  |
| 永島 鼎  | 農事試験場     |
| 永島 巖  | 農事試験場     |
| 野村 隆輔 | 種畜場       |
| 馬場留四郎 | 売店        |
| 北村 研二 | 医師・医薬局    |
| 高野 留七 | 医師助手・医薬局  |
| 石川 潔  | 運転手（モーター） |
| 福井 三郎 | 会計士       |

(『レジストロの六十年』p12)

1917年当時のレジストロ植民地の整えた建物は、事務所と医局を兼ねた建物、住宅2棟、独身者職員用の6軒長屋と称された合宿所1棟、売店1棟及びブラジル人から購入した建物2・3棟であった。また、市街地から植民地に向かう本通り沿いには、大規模な2階建ての収容所が用意されていた。ちなみに、1917年には、千葉園芸専門高等学校（現千葉大学造園学部）卒の永島鼎を責任者とした農業試験場が開設され、その後の1919年には野村隆輔による種畜場が開設されたという。

さて、入植者たちは、入植当時はこの収容所で生活し、やがて、自分たちの入植地を決め、そこで各々「小屋建、山伐り」（『レジストロの六十年』p11）を行ったという。この「小屋建」が簡単な、生活の基盤となる住まいを指すものと思われる。既に触れたように、分譲地の基準は、道路に沿って250メートル、奥行き1キロメートル、面積は25町歩であった。そのため、基本計画では1キロの道路沿いに8家族が入植することになるが、地形の関係もあって、実際には3・4キロの道路沿いに15-20家族が入植するという状況であったという。その様子は以下のように紹介されている。

3キロー4キロの延長で空地も出来るので、十五家族乃至二十家族前後と云うことに成る、これを一つの地域単位として「区」と称し、地域社会としての、冠婚葬祭は勿論、家建、屋根葺、また手おくれの手伝等、皆んなこの区内の範囲で行はれ、この区を四つ乃至六つをまとめた広範囲を「部」と称した

（『レジストロの六十年』p17）

これによれば、15-20家族が1つの単位として「区」となり、この「区」が4-6ま

たって「部」と称されていたことがわかる。そして、この「区」を基準に共同作業などが行われていたのである。この共同作業は、「冠婚葬祭は勿論、家建、屋根葺、また手おくれの手伝等」を指し、これから各自の住まいづくりや屋根の葺き替えといった作業も共同で行われていたことがわかる。ただ、労働力は確保できても、住まいづくりには専門知識が必要であり、大工や左官などの専門家がある程度の技術指導等を行ったものと思われる。ちなみに、このレジストロ植民地の前に開発された「桂植民地」には、「大工、左官等の職人」（『レジストロの六十年』p7）が入植しており、こうした日本での大工や左官などの経験者が住まい作りに関わったことは十分想像されることである。また、レジストロ植民地内に1919年に初めて学校が建設されたが、「この学校建築を請負ったのは大工は渡辺和佐太郎、左官竹下市太郎」であり、「この建築に当っては第四部の奥から深沢深一、加藤石松、和田陸衛、田中益雄等が間位置に一〇キロの道を馬で通ってこれに協力して呉れた」（『レジストロの六十年』p107）とあり、移植者の中に大工や左官職の技術者がおり、こうした住宅から学校などの建設に深く関わっていたことが窺えるのである。また、図2の「レジストロ植民地地図」を子細にみると、その理由は不明ながらも「492 大工 原宗一郎」「493 大工 原佳一郎」と名称の前に「大工」と記された人物が確認される（図3）。いずれにせよ、こうした伝統的技術者の存在により、異国の地であっても慣れ親しんだ伝統的な住まいを建設する技術も移民を通して持続されていたと思われるのである。

### 3-2 目視調査を行った7棟の住まいの概要

#### 3-2-1 Residencia Hukasawa（写真1）

この建物は、Hukasawa（深沢）邸で、現

当主の深沢清氏は、1945年ブラジル生まれで、父親は長野県出身の深沢伯一郎であるという。レジストロ市マンガ・ラルガ地区に建ち、同じ敷地内に1929年竣工の聖公会教会堂がある。

住宅は、木造2階建てで、寄棟瓦葺き屋根の建物で、台所部分は下屋となっている。外壁は、1階が半間毎に柱の見える真壁構造で、2階は隅柱だけ見える大壁風の真壁で、窓は縦長の両開き窓である。なお、住宅の古写真があり裏面の記述から撮影日が1936年10月26日であることから、撮影された1936年頃の竣工と推定される。また、この写真から、創建時は1・2階共に隅柱だけに太い柱の見える大壁風仕上げの真壁造りであったことがわかる。また、建物内部は、柱が見える真壁造りで、2階内部の個室の基本寸法は1間1800mm、天井高さは2600mm



写真1：Residencia Hukasawa

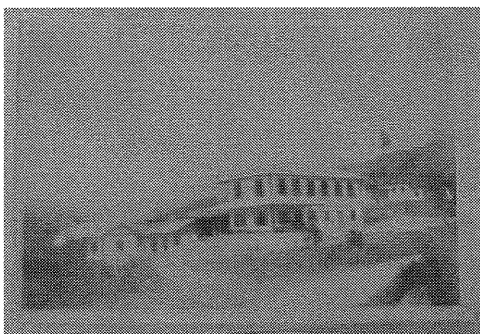


写真2：Residencia Hukasawa の古写真

であった。内部には和室はなく、総てイス座式の部屋であった。なお、『文化財技術に関する研究ーリベイラ溪谷における日本人移民』(p63)によれば、現存する住宅は、創建時のものではなく、現在の建物は後の建替えによるものであるという。

内部の柱の見える真壁造りや1間1800mmという設計基準寸法は、日本の伝統建築と共通するものであり、内部に畳敷きのユカ座の部屋はないものの伝統建築に共通した構法による建築であることがわかる。

### 3-2-2 Residencia Hokugawa (写真3)

この住宅は、Hokugawa (六川) 邸で、レジストロ市マンガ・ラルガ地区に建つ。創建時の所有者は、Yamadera (山寺?) 氏で、配置が特異で小川の上に建てられ、汚物をその川に流していたという。建物は木造平屋で、屋根は入母屋瓦葺屋根である。外壁は、



写真3：Residencia Hokugawa

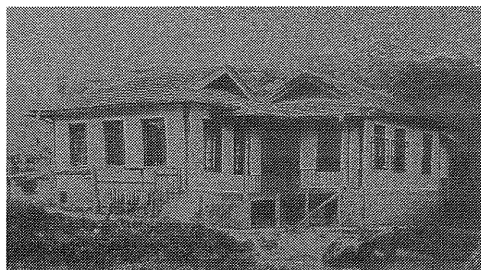


写真4：Residencia Hokugawa の古写真

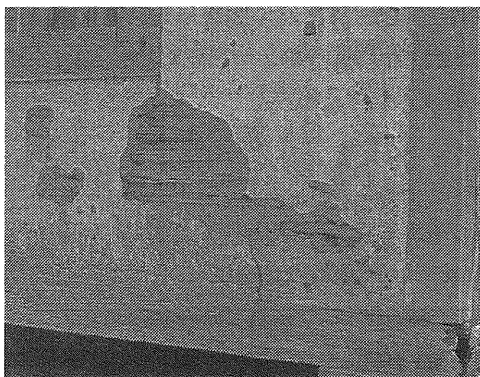


写真 5：壁の様子



写真 6：内部の梁の「十二尺梁」の書き込み

隅の太い柱のみ見える大壁風の真壁造りで、窓は縦長の両開き窓である。現在、建物の傷みが激しく傷んでいるが、古写真があり、その様子が窺える（写真 4）。なお、傷んでいるため、建物の構造がよくわかる。すなわち、壁は、細い木材を竹の代わりに用いた木舞に土壁で、仕上げは漆喰風の仕上げである（写真 5）。また、構造は、和小屋で、梁材などに寸法や部位名称の日本語が確認され（写真 6）、日本人工工の手によるものであることがわかる。

### 3-2-3 Residencia Shimizu（写真 7）

この住宅は、Shimizu（清水）邸で、レジストロ市アレイアス地区に建つ。創建時の所有者である、Sojiro Shimizu は、1925 年、

38 歳でブラジルに渡ったという。『文化財技術に関する研究－リベイラ溪谷における日本人移民』（p67）によれば、この建物は「移民工場の代表的な建築」とあり、清水は、最初は他の移民と同様に仮設住宅で暮らし、コーヒーから茶の栽培と製茶に事業を発展させ、その時、家族の住まいと製茶工場を兼ねてこの建物を建てたという。大工は、Minoru Ushino で、竣工年は不明だが、1930 年代の建物と推定される。

建物は木造 2 階建てで、屋根は入母屋瓦葺屋根である。基礎は煉瓦で、外壁は隅の太い柱のみ見える大壁風の真壁造りで、窓は縦長の両開き窓である。2 階には、煉瓦柱に支えられたベランダが付く。壁は、細い木材を竹の代わりに用いた木舞に土壁で、



写真 7：Residencia Shimizu



写真 8：キングポストを用いた製茶工場の大空間

仕上げは漆喰塗で、内部は柱の見える真壁造りである。1階は住まい、2階は製茶工場である。2階は作業を行うために内部には柱のない大空間となっている。この大空間を実現するために、小屋はキングポストトラスを使用している（図8）。

#### 3-2-4 Residencia Sr. Gozo Okiyama（写真9）

この住宅は、Gozo Okiyama（沖山）邸で、レジストロ市リベイラオン・デ・レジストロ地区に建つ。Okiyama氏は、八丈島出身で、オキノカブ氏の建てた住まいを購入したという。建物は、1930年代の建物（約80年前か？）ではないかという。現在の当主は、オキヤマキヌエ氏で、1938年生まれで、現在、コーヒー、イグサを生産しているという。

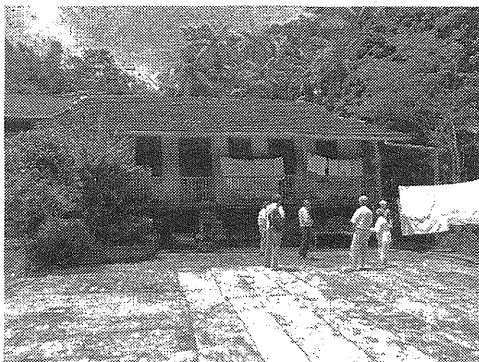


写真9：Gozo Okiyama

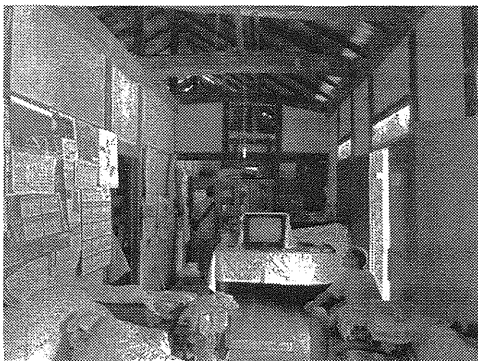


写真10：Gozo Okiyama の内部

建物は、木造平屋建て、入母屋瓦葺屋根。傾斜地に立ち、一部高床式で、床下が収納に使用されている。住まいの前に広いコンクリの叩きがあり、コーヒーやイグサの乾燥場として使用し、その叩き側にペランダが付いている。壁は内外共にほぼ半間毎に建つ柱の見える真壁造りである。当初は、外壁の柱は見えなかった可能性もある。開口部は、縦長の内開きの板戸窓で、内部には天井が無く、各部屋の上部は筒抜けである（写真10）。台所は母屋の下屋（離れ）にあり、隣の部屋も土間で食堂として使用していた。便所は屋外に設けられている。また、母屋に連結して大きな納屋があり、農具や機械類が収納されている。

#### 3-2-5 Residencia Sr Susu Okiyama（写真11）

この住宅は、Gozo Okiyama（沖山）と兄弟のSusu Okiyamaの住まいで、レジストロ市リベイラオン・デ・レジストロ地区に建つ。現在の当主、沖山すず氏は、現在88歳でレジストロ生まれの2世で、旦那さんは沖山勝広氏。『文化財技術に関する研究ーリベイラ渓谷における日本人移民』（p66）によれば、この住宅はラポタ地区にあったウエノヤマ氏の建物を購入し、解体して現在の地に移築したものであるという。建物の竣工年は



写真11：Susu Okiyama 邸





写真 12 : Susu Okiyama 邸内部

不明。木造2階建ての総2階建てで、切妻瓦葺屋根、台所は下屋と離れからなる。母屋の基礎は煉瓦で、外壁は、柱が外壁に露出した真壁造りで、窓は縦長の上げ下げ窓で鎧戸が付いている。内部は真壁造りで、壁は竹木舞の土壁で、小屋も和小屋で畳敷きの部屋はない（写真12）。

### 3-2-6 Casa Amaya（写真13）

この建物は、Amaya（天谷）氏の住まいで、レジストロ市バンプハル地区に建つ。天谷捨吉、天谷平三郎そして、現当主の天谷良吾氏がアマヤ製茶工場を受け継いできた。初代の天谷捨吉氏は、北海道出身で、1919年に入植している。現当主の父・天谷平三郎氏はブラジルへ向かう船の中で生まれたという。

建物は、木造2階建て、切妻瓦葺屋根、外壁は隅柱だけが見える大壁風の真壁造りを基調としつつも、下屋部分では隅部の柱が隠れ、他の柱が見える部分も見られるなど、統一性が無く、窓も多様である。竣工は、1923年といわれ、2階にベランダがある。内部は、1階部分の天井高がおよそ2100mmと低く、2階の天井高の方が高い。2階の床部分が改築されている。また、内部は柱の見える真壁造りで、1階下屋の窓は引違窓、2階は引違窓と上げ下げ窓、開き窓が混在し



写真 13 : Amaya 邸

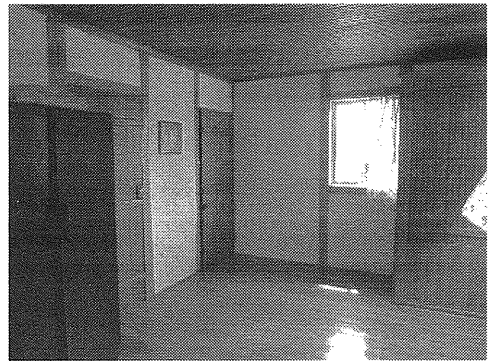


写真 14 : Amaya 邸 2 階

ている（写真14）。こうした混乱は、増築をしている可能性を示唆するものといえるであろう。なお、畳敷きの部屋は無い。

### 3-2-7 Residencia Amaya（写真15）

この建物は、アマヤ製茶工場を経営して



写真 15 : Amaya 邸



ロ市バンブハル地区に建つ。

建物は、木造2階建て（1階はレンガ壁の可能性もある）、寄棟瓦葺屋根、外壁は大壁造りで、窓は縦長の上げ下げ窓である。正面2階に煉瓦柱で支えられたベランダがあるのは、先に見た Amaya 邸と類似している。移民の日本人の住まいをブラジル人が購入し、それを天谷氏が購入し、現在に至っているという。80年ほど前の建物というから、1930年代前半のものか。ちなみに、『文化財

技術に関する研究—リベイラ溪谷における日本人移民』（p77）によれば、竣工年は1930年であるという。

### 3-3 目視調査を行った7棟の住まいの特徴

今回目視調査を行った住宅建築7棟について、改めてその概要を整理すれば以下のようになる。

| 施主名（住宅名）       | 竣工年     | 規模     | 外壁仕様 / 内壁仕様      | 屋根形状  |
|----------------|---------|--------|------------------|-------|
| ① Hukusawa     | 1936年頃  | 木造2階建て | 1階真壁、2階大壁風真壁     | 寄棟瓦葺  |
| ② Hokugawa     | 不明      | 木造平屋   | 大壁風真壁 / 真壁風（和小屋） | 入母屋瓦葺 |
| ③ Shimizu      | 1930年代  | 木造2階建て | 大壁風真壁 / 真壁風（洋小屋） | 入母屋瓦葺 |
| ④ Gozo Okiyama | 1930年代か | 木造平屋   | 真壁風 / 真壁風（和小屋）   | 入母屋瓦葺 |
| ⑤ Susu Okiyama | 不明      | 木造2階建て | 大壁風真壁 / 真壁風      | 切妻瓦葺  |
| ⑥ Casa Amaya   | 1923年   | 木造2階建て | 大壁風真壁 / 真壁風      | 切妻瓦葺  |
| ⑦ Amaya        | 1930年代か | 木造2階建て | 大壁 / ？           | 寄棟瓦葺  |

これによれば、目視調査のできた住宅建築7棟の内訳は、規模から見ると木造2階建てが5棟、平屋が2棟であった。また、屋根形状は、日本独特の屋根形式といわれる入母屋が3棟、寄棟2棟、切妻2棟、であった。外壁の仕様は、隅柱だけが露出する柱の见えない大壁風の真壁仕上げが5棟で、真壁が1棟、大壁が1棟であった。

ちなみに、池谷弘子は1933年発行の『伯刺西爾イグアッペ植民地創立廿週年記念写真帳』（1934年）に掲載された住宅写真をもとに移民たちの住宅形式について報告している（「レジストロに見られる移住地形成期の住宅の型」日本建築学会東北支部研究報告会、平成17年6月）。これによれば、住宅形式が判読できる122例の内訳は、平屋74例、2階建て47例、3階建て1例で、平屋が最も多かったという。同様に屋根形式は119例中、切妻55例、寄棟31例、入母

屋28例、半切妻1例、腰折れ1例、であり、外壁の壁構造は、119例中、真壁114例、煉瓦混4例、板張り1例であったことを報告している。これと比較すれば、今回の7棟の存在は貴重ではあるものの、そこに見られる建築的特徴画、当時の移民の住まいの傾向を正確に現わしているとはいえない部分も見られることが窺えよう。こうした点は今後の課題といえるであろう。

一方、内部の壁仕様は、確認できた6棟すべてが真壁風の柱の見える日本の伝統的形式と同様のものではあった。また、部分的ではあるものの、その柱間寸法を確認できた① Hukasawa 邸の2階の個室の柱間は、1間約1800mm、天井高さは2600mm、であった。これらの数値は、1800mmはおおよそ6尺、2600mmはおおよそ8尺5寸となり、設計寸法として伝統的な1間6尺という田舎間を用いている可能性が極めて高いことが推測さ

れる。また、②Hokugawa 邸では、小屋組みの部材に日本語の記述があり、また、壁の構造が伝統的な木舞を組美、土を塗るという伝統的形式と同様の方法が見られること、③Shimizu 邸の土壁の下地は日本と同様に建てを用いていることなど、を考えれば、壁の造り方も日本の伝統的方法と同様のものではあったといえるであろう。このように外壁は大壁風であるものの、内部には柱の見える真壁風の造りであること、その柱の配置の基準寸法が1間6尺を基準としていると考えられること、屋根形状が入母屋造りも見られること、などから、これらの建物は、日本人大工の手により日本の伝統的な工法や寸法を用いて造られたことが推定されるのである。

一方、内部の部屋を見ると、畳敷きのユカ座の部屋は全くなく、各部屋はイス座の部屋であった。これは、言い換えれば、これらの住まいが創建時の様子を正確に示しているのか、あるいは、その後の増改築を経て今日の姿となったのかなど詳細な検討が必要であるものの、わが国の伝統的な起居形式であるユカ座という身体技法に根ざした生活形式の継承はほとんどなされなかったことを意味するといえ、技術の継承とは異なった様相が見て取れるのである。

なお、これらの住まいの建築年代は、⑥Casa Amaya がもっと古く1923年といわれ、他は基本的には1930年代の建物である。最も古いAmaya 邸は、入植後の4年後の建物となる。おそらく、入植当時は、小屋を建てて住み、経済的な余裕ができた中で本格的な住まいづくりが行われ、現在の建物が建設されたものと推測される。最初期の小屋は、畳に入手が難しく畳はなかったと思われるがユカ座の生活は行われていたと推測される。その後、異国の地の生活スタイルへと同化していった中で、本格的な住まいづくりが行われ、畳の入手も困難なこ

ともあってユカ座の部屋のない住まいが造られたという可能性も考えられる。今回の調査対象となった7棟は、基本的には、この⑥Casa Amaya 邸同様に、入植初期の建物ではなく、経済的生活的に余裕のできた後の建物と推定されるため、ユカ座の生活は、畳の入手も難しく、現地の生活スタイルとしたものと推測されるのである。

#### 4 まとめにかえて・・・今後の課題

今回目視調査ならびに簡単なヒアリングを行った移民の人々の生活する7棟の住宅建築は、建築としては、わが国の伝統建築に極めて近いものであるといえ、日本人大工の手により日本の伝統的な工法や寸法を用いて造られたことが推定されることが明らかとなった。

こうしたわが国固有の寸法を用いている点に関しては、『文化財技術に関する研究ーリベira溪谷における日本人移民』においても「建物における寸法」(p25-28)として、論じている。ただ、具体的に、今回取り上げた7事例を含め、保護対象となった住宅建築全体の具体的な寸法が詳細に分析されているわけではなく、「原型住居」として2間×4間の土間とユカ敷き部分からなる建物の間取りと断面を描いて、その寸法と間取りの関係性を論じているだけである。より考察を深めるためには、今後、より詳細に実測調査などを行い資料収集にあたる必要があるであろう。加えて、当時の活躍していた大工屋職人の人々についても資料を収集し、どのような技術者であったのかを明らかにする必要があるであろう。また、当時のブラジルの建物との比較を通し、どのような影響を受けているのかなどの比較検討も必要であろう。そして、また、生活面では、間取りの変化とその内部での生活の様相をヒアリングするといった方法による生活調査も必要と思われる。

いずれにせよ、今回の目視した建物の大半は、経年変化により痛みが激しい。今後の文化財として保護するために、修復の必要がある。日本人大工による建築であるならば、修理は、当時の技術を確認し日本人大工が担当するといったことの必要性も起こる可能性もあるであろうし、それが、創建時の技術などを失うことなく建築を保護することにもなる。その意味で、研究はも

とより、今後の修復のためにも、様々なことの詳細な解明が必要であろうし、われわれの今後の研究がそうした事業の基礎ともなる可能性も秘めており様に思われる。

なお、本報告は、平成 24・25 年度科学研究費・挑戦的萌芽研究「ブラジル日系意味及び在日日系ブラジル人の民俗学的研究」(代表：佐野賢治)の一環として行われた調査報告である。

## 新刊紹介

須藤 護 著

### 『雲南省ハニ族の生活誌－移住の歴史と自然・民俗・共生－』

本書は、著者が 2002 年度一年間、中国雲南省ハニ族の村に滞在調査した民俗報告である。宮本常一門下の著者は、「ある民族が長い年月にわたって育み保持してきた文化は、日常的に、無意識のうちに、また自然な形で言動に表れる、……さらにそれは、ムラの景観の中に特徴的に現れる」と日常生活・村落景観に注視しながらハニ族の人々の生活誌を以下の構成で描く。

序章 壮大な棚田を作り上げた人々 ①ハニ族の故地 ②ハニ族の移住にみる民族の抗争と和解 ③父子連名制と家譜 ④昆明から少数民族の領域へ ⑤雲南省元陽県のハニ族

⑥ムラの開発とクザザ節 ⑦アマトウ節と寨神林 ⑧暮らしのサイクル－紅河県壩美村ハニ族の節令表 ⑨稲の収穫と棚田の補修－元陽県全福庄の節令表 ⑩十月年－新しい年を迎える儀礼 ⑪霜雪神祭から山のカミの祭りまで ⑫開秧門から拝鬼節まで ⑬新米節  
終章 世界文化遺産の登録にむけて、巻末には索引を附している。

ハニ族はその棚田耕作で知られ、映画『雲南の少女 ルオマの初恋』でもその背景とし

て登場し、本書の中心をなす元陽の棚田は本年、2013 年世界文化遺産に登録された。日本の民俗学では照葉樹林文化論が盛行の折、ハニ族の新米を先祖、穀霊および天神に供えた後に共食する儀礼が新嘗祭に連なるものとして注目を浴びた。須藤は、棚田の開発、用水管理、水田養魚など従来、報告の少なかった領域を図化し、写真を多用し理解を助ける工夫をするなど棚田に集約させてハニ族の生活を丹念に描いている。その一方で、個人的には祭祀儀礼における宗教職能者・モービの役割などに更なる説明が欲しい思いがした。

著者が本書で強調するのはグローバル化で文化の一元化が進む中、固有の文化を尊重しながらの文化の多様性、共生であり、ハニ族文化はそのモデルになりえるとの指摘である。ハニ族研究は、本研究会の同人、琉球大稲村務教授が早くから取り組んでおり本誌でも馴染みがあったが、生活誌からの視角を本書から多々学ばせて頂いた。(佐野賢治)

A 5 判 272 頁 2013 年 8 月刊

ミネルヴァ書房